

「カルチャー・ショック」と適応理論の再考察

池田 理知子

1. はじめに

異文化コミュニケーションの教科書には、必ずといってよいほど「カルチャー・ショック」及び適応に関する説明がでてくる。この分野の研究が行われるようになって約40年、一貫して異文化コミュニケーションの主要な位置を占めていることの表れといえよう。さらに、多文化社会といった言葉を日常耳にする機会が増えた今日において、この分野における研究の重要性がますます増大していくことは間違いない。

「カルチャー・ショック」及び「文化適応」に関する研究が盛んに行われるようになったのは、まずアメリカにおいてであった。1957年にビールズとハンフリーが「カルチャー・ショック」という言葉を初めて使い、その翌年以降文化人類学者オバークがその解説を行ったことから次第に広がったとされている(星野, 1980a)。日本でこの分野の研究がなされるようになったのは1970年にはいつてからである。近藤裕(1981)も指摘しているように、早くから異文化及び文化摩擦現象の学術的研究に力を入れてきた米国に比べて、日本のこの分野での研究が立ち後れた感は否めない。1970年以降の海外渡航者の増加及び「帰国子女」の問題といった社会的変化を受けて、ようやく日本の文化人類学者や社会学者の間で異文化接触に伴う問題点を学術的に研究する機運が高まってきたといえる。

1980年代前半には、日本におけるこの分野の第一人者によって「カルチャー・ショック」及び「文化適応」に関する研究の総括がなされている。その代表的なものとして、星野命の「カルチャー・ショック」(1980a)、近藤裕の『カ

ルチュア・ショックの心理」(1981)、原裕視の「異文化衝撃とその影響」(1985)などが挙げられよう。彼らが整理・検討した「カルチャー・ショック」の定義・要因・徴候そしてその位相が、日本でのその後の研究の指針となったことは間違いないだろう。

しかし、ここで改めてこの分野の研究を見直してみると、「カルチャー・ショック」及び適応理論が説明する現象とはいったい何なのか、その内容が明らかにされる必要を感じる。たとえば、「カルチャー・ショック」現象とははたして「ショック」という言葉が示すように一過性のものといえるのか、何をもって「適応」したとみなすのか、といった議論がこれまで十分なされてきたとはいいがたい。総括が行われてから約20年たった現在、ここで今一度理論の検討を行うことはこの分野の重要性を鑑みると意義あることと考える。

2. 「カルチャー・ショック」の定義とその一般的な傾向

まず、「カルチャー・ショック」の定義の一般的な傾向を整理してみたい。大きく分けて、次の5つが上げられる。①表象の解釈が自らが慣れ親しんだものとは異なるために「カルチャー・ショック」が起こるとする定義、②心理的、感情的及びそれに伴う身体的反応に重点をおいている定義、③「カルチャー・ショック」をネガティブに捉えている定義、④「カルチャー・ショック」をネガティブに捉えている定義に反論を加えている定義、⑤「カルチャー・ショック」を一連の変化の過程及び長期にわたる現象をも含むとする定義である。

①の表象の解釈が自らが慣れ親しんだものとは異なるために「カルチャー・ショック」が起こるとする定義の代表的なのが、オバークによるものである(Oberg, 1960)。オバークは、「カルチャー・ショック」とは「対人関係においてのなじみ深い表象を失うことの結果として生ずる不安感によって助長されるものである」(近江, 1990, p. 118)とする。E・T・ホール(1959)も同様に「文化ショックとは、簡単にいえば、個人が自分のところで当面してきた沢山のなじみのある手がかりが失われたり、歪められたりした上に、他のなじみのない手が

かりにとって代わられることである」(p. 170)としている。

人は自らの視点から完全に自由になることはない。故に、新たな環境において出会うサインやシンボルの解釈はまず自らの視点においてなされる。そうすると、その解釈はその地で育った人のものと相容れないこととなる可能性がある。そもそも個々人の解釈がまったく同じになることはないのだが、その違いがあまりにも大きければフラストレーションがたまる。たとえば、相手の微妙なしぐさの意味が読みとれない、あるいはまったく別の意味にとっていた、といったことが重なると、いわゆる「カルチャー・ショック」が起これると考えられる。

②の心理的、感情的及びそれに伴う身体的反応に重点をおいている定義は多く見受けられる。たとえばタフトは、「カルチャー・ショック」は「個人の先学習にたよっていたのでは、不適切にしか対応できないと分かるような、不慣れの文化的環境に身をおいたときに悩まされる、何らかの感情的障害の状態」(星野, 1980a, pp.7-8)と捉えている(Taft, 1977, p.139)。ワイズマンとファーナムは、「カルチャー・ショックとは顕著な生理的・身体的報酬をえられることが概してはつきりしなかったり、操作あるいは予測が困難な時に起こるストレス反応である」(Weissman & Furnham, 1987, p.314)とする。また、ガスリーは「カルチャー・ショック」という言葉の代わりに「文化疲労」という表現を用い、その内容として増大する焦燥感、易怒感、憂うつ、食欲不振、睡眠不足(及び不眠症)、不定愁訴(不明確な身体症状)などを上げている(Guthrie, 1975)。星野(1980a)、近藤(1981)及び原(1985)も「感情的衝撃」、「心理的反応」、「身体的・心理的・社会的不適応状態」といった表現をそれぞれ使っている。

こうした心理的、感情的及びそれに伴う身体的反応に重点をおいている定義の中には、「カルチャー・ショック」をネガティブに捉えているものも少なくない。前述のタフトは、「カルチャー・ショック」を「何らかの感情的障害の状態」としているが、その内容として緊張、喪失感、被剥奪感、劣等感、混乱、驚き・不快・不安・憤慨・嫌悪の情、不能感といった症状を上げている(Taft,

1977)。星野(1980a)も「慢性的パニック状態」というネガティブな響きのある表現を使用している。さらにランドステッドは、「性格的適応不全の一形態(a form of personality mal-adjustment)と「カルチャー・ショック」を位置づけている(Lundstedt, 1963)。

これに対し、「カルチャー・ショック」とは必ずしもネガティブなものではないとする定義もいくつかある。ひとつは、「カルチャー・ショック」を人生における転機、たとえば転勤や転居、結婚といった場合に経験する「ショック」と同じものと捉えるもので、ベネットの定義がそれに当たる(Bennett, 1977)。また、アドラーは文化学習、自己成長の一過程と捉え、「カルチャー・ショック」がネガティブなもののみならず一般的な傾向に異議を唱えている(Adler, 1975)。

最後の「カルチャー・ショック」を一連の変化の過程及び長期にわたる現象をも含むとする定義に関しては、オバークの「カルチャー・ショック」を一連の変化の過程で4つの段階に区分できるとするものや(Oberg, 1960)、星野(1980a)の心身症状や累積的に起こる潜在的、慢性的パニック状態をも含むものとするもの、近藤(1981)、井上(1979)、原(1985)のように累積性・持続性を「カルチャー・ショック」の特徴のひとつと捉えるものなどがある。確かに、「カルチャー・ショック」は一過性の現象とはいえない場合が多いため、こうした定義にはうなずける。この点に関して、詳細は次項に譲る。

以上5分類に関して説明を加えたが、これら5つの分類は、単純に並記されるものではないことを付け加えておく。①の定義は初期の頃に見受けられるもので、「なじみ深い表象を失うこと」の内容についての検討はほとんど行われていない。②の定義は①の内容を受け、心理的、感情的及びそれに伴う身体的反応といったさらに踏み込んだところにまで言及している点で共通している。その②に対して、③ネガティブあるいは④ポジティブに捉えるのかの評価が分かれている。そして、②の反応の期間が長期にわたる可能性を示しているのが⑤の一連の定義である。

3. 定義の検討

次に、定義の検討作業に移る。ここでは3つの点から検討を加える。ひとつは「カルチャー・ショック」をネガティブに捉える定義の問題、それから「カルチャー・ショック」と自己成長を関連づける捉え方の問題、最後に「ショック」という言葉の問題について述べる。

(1) ネガティブ対ポジティブ

まず、2項で示したように「カルチャー・ショック」をネガティブに捉えている定義と必ずしもそうではないとする定義に分かれるが、筆者は後者の方がより説得力のある定義だと考える。

まず、「カルチャー・ショック」を新たな文化への移住者の「感情的障害」(Taft, 1977)、「性格的適応不全の一形態」(Lundstedt, 1963)、「身体的・心理的・社会的不適応状態」(原, 1985)などと捉える見方は、移住者の移住先での適応/不適応を問題にしているが、そこでは移住者が新たな環境に適応するのが当然で、不適応状態である「カルチャー・ショック」は健全ではない克服すべき状態といった考え方が根底にある。そしてこうした考え方が如実に反映されているのが、「カルチャー・ショック」及び「文化適応」が語られる際に使われる「ホスト (host)」という言葉である(池田・クレイマー, 2000)。そこでは新たな移住者、新来者の受け入れ先という意味で「ホスト」が使われている。だが、英語の“host”には客人をもてなす「主人」という意味だけでなく「寄生生物 (parasite)」の寄生先という意味があり、「寄生生物」を指す“parasite”には、「居候」「厄介者」といった意味が含まれる。つまり、“host”という言葉はその対になる“parasite”を想起させ、<移住者=客人/居候>(滞在が長くなれば「客人」は「居候」となる)は「厄介者」というイメージを与えるのである。逆の言い方をすると、移住者は「厄介者」であるという見方が根底にあったからこそ、移住者の受け入れ先として“host”という表現があえて使われたともいえる。

だが、移住者ははたして「厄介者」なのであろうか。実際には、移住者は

「居候」、「厄介者」どころか、移住先に多大な利益をもたらす場合が少なくない。たとえば、世界各地に移住していった華僑、アメリカ合衆国のメキシコ人、南米の日系人などその地の経済に貢献している人々は大勢いる。また、アメリカ大リーグで活躍している日本人選手、Jリーグの外国人選手などは、その社会にとってなくてはならない存在である。彼らがもたらす文化・社会的影響は小さくない。

さらに、<主人=寄生先>対<客人=居候・厄介者>といった片方が相手に寄りかかる関係と捉える見方は、移住者と移住先のダイナミックな相互作用を見落としがちである。新たな文化環境へは行っていくということは、移住者のみならず受け入れ側の文化環境も少なからず影響を受けることを意味する。たとえば、在日外国人の増加は日本社会にさまざまな影響を及ぼしている。また、いわゆる在日韓国・朝鮮人作家が読者に支持されているのも、相互作用の一例であろう。移住者は移住先での新たな一石となりうる。そしてその一石は波紋が広がるように、移住先の文化環境に波及効果を及ぼす。つまり、移住者はその文化環境の一翼を担うのである。移住者自身も新たな環境の中でその人格やアイデンティティを形成する。故に、移住者の側に問題があるため「カルチャー・ショック」を経験せざるをえず、その時点では「ホスト」文化においては機能できないとする「ホスト」側から見た現象の捉え方は、一方の側からの視点のみを問題としており不十分であるといえる。

まとめると、「カルチャー・ショック」をネガティブに捉える定義が前提とする移住者と移住先の関係は、まさに西欧的視点を反映している。そこには、西欧諸国（特に米国）に移住してきたら、移住者は「ホスト」に頼らざるをえず、そのためには「ホスト」に合わせる努力をしなければならないのだとする強者の理論がみえてくる。だが、「カルチャー・ショック」を理解するためには、いったんそうした一方通行の関係及び権力構造を括弧に入れて、今一度現象をありのままに捉える必要がある。一方、「カルチャー・ショック」を人生における転機に起こりうる何らかの「ショック」と捉えるベネット (Bennett, 1977) や、文

化学習、自己成長の一過程と捉えるアドラーの定義 (Adler, 1975) は、相互作用という観点から欠けてはいるものの「カルチャー・ショック」が必ずしもネガティブなものではないという新たな視点を提起してくれた。

(2) 「カルチャー・ショック」と自己成長

次に、「カルチャー・ショック」を自己成長と結びつける考え方の問題点を明らかにしていく。アドラーは、先にも述べたように「カルチャー・ショック」を文化学習、自己成長の一過程と捉えるポジティブな視点を提供してくれたが、その一方で新たな文化を学ぶことによって自らが成長するとする進化論的観点に立った上で次のような定義づけを行っている (Adler, 1975)。「カルチャー・ショック」は「文化学習、自己成長、人格の発達における重要な側面となりえ、カルチャー・ショックの過程で起こる問題やフラストレーション、、、といった変遷は、人格成長のより高度なレベルへの源となりうる」 (Adler, 1975, p. 14)。

人が新たな経験をするのが即ち「成長」といえるであろうか。

解釈学者ガダマーが言うように、今まで経験したことのないような状況やメッセージ (小説、絵画、他者との会話など) に自己を開いた状態で触れることによって、人は変わっていく (Gadamer, 1960/1975)。たとえば、教育を受けることによって人は変わっていく。教師、本、友人などとの出会いを通じて新たな情報に身を晒し、自ら変わっていくのである。いわば新たな地平が開かれるのである。だが、新たな地平が開かれるということは、今までの地平を捨て去ることを意味するのではない。人は自らの視点を捨て去ることができないように、まったく新たな地平の構築などできない。開かれた地平とは、それまでの地平が新たな経験を受け入れることにより変化したことを意味する。今までの経験があるからこそ、新たな経験を自分なりに消化できるのであり、今までの経験を消し去る、あるいはなかったものとするなどできないのである。人はさまざまな経験を積むことによって変わっていく。その経験は必ずしも楽し

いことばかりではない。時には苦しいこともある。だが、その苦しかった経験も後になって思い出せば懐かしいものとなる。このように、さまざまな経験を積み重ねることによって、自己も絶えず変化し、そしてその自己が行う経験の意味づけもまた変わっていくのである。

だが、この変化は「成長」や「進化」と必ずしも同一ではない。実際、ガダマーは変化を「成長」や「進化」と捉える考え方に警鐘を鳴らしている。何を「成長」、「進化」と捉えるかは、どの視点をとるかによって変わってくる。4年間外国の大学に通い成長したと思っていたのに、故郷の友人たちからは生意気になったといわれたといったエピソードは、こうした視点の違いを物語っている。

要は、「カルチャー・ショック」によって自己変化 (change) は起こるが、それは必ずしも成長 (development) ではないのである。成長とみるのは、ひとつの視点にすぎないといえる。

(3) 「ショック」という用語の妥当性

最後に「ショック」という用語の妥当性について考察を加える。

2項で示したように、多くの学者が「カルチャー・ショック」を一連の変化の過程及び長期にわたる現象をも含むものと定義づけている。たとえばオバークは、「カルチャー・ショック」を新たな文化環境へ接した当初の心理的反応だけでなくその前後をも含めたより包括的な概念とし、後で述べる「U型曲線」モデルへとつながる考え方を提示している (Oberg, 1960)。星野 (1980a)、近藤 (1981)、井上 (1979)、原 (1985) といったこの分野での日本の代表的な学者も累積性・持続性を「カルチャー・ショック」の特徴のひとつと捉えている。中でも井上 (1979) は、その内容を次のように表現している。

ショックという言葉から連想されるように、ひとつの出来事にぶつかって、急にショックを感じるという現象だけでなく、累積的に違和感が積み重なって結果的に不適応状態に陥ったものが多い。些細な誤解や不和の繰り返し

し、努力を重ねても理解に苦しむ行動が続き、自分のやりたいことが思い通りにいかない。イライラ、不安がつのり、どうしようもない無力感が深まる。このような「潜在的・慢性的パニック状態」として進行するのがカルチャー・ショックの大部分である。(p. 33)

井上も指摘しているように、この「ショック」という言葉には、一過性、一瞬の衝撃という意味がある。さらに、苦痛が伴うものという意味合いも持つ。だが、井上が描くイライラや不安、無力感、またホームシックや鬱状態、新しい文化環境に対するネガティブな評価といった一般的に「カルチャー・ショック」という概念で語られる現象は、一過性の現象といえるものではない。またそうした経験を非常に苦痛と感じる人もいれば、それほどでもないと感じる人もいる。

たとえばカリフォルニアに点在する日系アメリカ人 1 世及び 2 世のための老人ホームや高齢者コミュニティは、米国文化になにがしかの違和感を感じていた 1 世・2 世の強い要望によって建てられたという。また日本でも、在日韓国・朝鮮人専用の老人ホームやデイケアセンターの建設が始まった。そして、そうした設備を求める声は年々高まっているようである（同胞高齢者大阪府調査, 1997; 吉坂, 1999）。年を重ねると、よけいに子供の頃に慣れ親しんだ食べ物が欲しくなったり、母語で語り合いたくなったりすることがあるといわれている。日系アメリカ人 1 世及び 2 世や在日韓国・朝鮮人 1 世は、おそらく拭いきれない違和感を未だに抱いているに違いない。日本に強制あるいは半ば強制的につれてこられた在日韓国・朝鮮人 1 世はもとより自ら移住したはずの日系アメリカ人 1 世及び 2 世も、その「ショック」は完全には消え去っていないのではなかろうか。だが、彼（女）らの移住先で感じていた違和感が常に苦痛を伴うほどのものであったかという点、おそらくそうではなかつたであろう。移住先の生活が楽しい時も多分にあつたであろう。そういう折は、違和感はそのほど強くなかつたはずである（池田・クレイマー, 2000 参照）。

上記の例が示すような完全には消え去ることのない違和感、一瞬のショックとは呼べないような現象を「カルチャー・ショック」という言葉で表すのは適当ではないように思われる。表現とその内容が乖離してしまっている以上、「カルチャー・ショック」という表現自体を見直す時期にきているのではないだろうか。

4. 適応の位相モデル

「カルチャー・ショック」を一連の変化の過程と捉える考え方の延長に、その変化を位相としていくつかの段階に区別する試みが行われている。たとえば、オバークヤスモリー、フォスター、タフトは「カルチャー・ショック」及び適応過程を①蜜月段階 (honeymoon stage)、②拒否段階 (rejection stage)、③適応移行段階 (beginning of adjustment stage)、④適応段階 (adjustment stage) の4段階 (学者によって多少の表現の違いがみられる) としてまとめている (Oberg, 1960; Smalley, 1963; Foster, 1973; Taft, 1977)。また、アドラーは①接触段階 (contact stage)、②崩壊段階 (disintegration stage)、③再統合段階 (reintegration stage)、④自律段階 (autonomy stage)、⑤独立段階 (independence stage) の5つを上げている (Adler, 1975)。稲村 (1980) も5段階に分けており、①移住期、②不満期、③諦観期、④適応期、⑤望郷期という区分を提示している。

移住から適応までの変化を説明する試みの中で最も知られているのが、リスガードの「U型曲線」仮説であろう (Lysgaard, 1955)。リスガードは、「適応とはU型曲線を辿る時間的経過プロセスである」(p. 51)としている。

まとめると、学者によって位相を4段階あるいは5段階、または曲線と捉えるかの違いはあるにせよ、移住から適応までの変化を<表面的適応→適応の危機→適応>とおおまかに捉えている点は共通している。

さらに、「U型曲線」の横軸である時間経過を自文化への再帰段階にまで延長した「W型曲線」モデルが、ガルホーンらやトリフォノヴィッチによって提唱されている (Gullhorn & Gullhorn, 1963; Trifonovitch, 1977)。このモデルは、ある

程度異文化に適応した後で帰国すると、自文化において同じような再適応のプロセス<帰国直前の期待と喜びで胸躍らせる時期→帰国後期待が打ち砕かれ落ち込むショック期→適応>を辿るというものである。

5. モデルの検討

では次に、こうしたモデルの検討にはいる。

まず、「U型曲線」仮説及び「W型曲線」仮説を否定する報告がなされており、仮説の欠点が指摘されている。たとえば、クラインバーグとハルは全ての移住ケースが新しい地での期待と興奮で始まるわけではないとしている (Klineberg & Hull, 1979)。また、チャーチが過去の文献を調べて出した結論は、「U型曲線」仮説は支持されているとはいえずむしろあまりにも一般化しすぎたモデルといえる、というものであった (Church, 1982)。ワイズマンとファナムは、「多かれ少なかれ、過去の実証的文献はモデルに対するサポートを限定的に行っているにすぎず、きわめて曖昧である」 (Weissman & Furnham, 1987, p.315) と言っている。

モデルの単純さを指摘する声もある。星野 (1980a) はこのモデルが単一のパターンを示しているだけで、そのヴァリエーションを具体的に示していないとする。また、それぞれの段階の位相を促す要因についてほとんど触れられていないことも挙げている。

また、両モデルは時間経験の主観的側面をまったく考慮していない (池田・クレイマー, 2000)。人によって、ある期間を長いと感じるのかそれとも短いと感じるのか異なる。一般的に楽しい時、忙しい時はあっという間に過ぎていくように感じ、あまり楽しくない時、退屈な時は時間がゆっくり流れるように感じる。両モデルの横軸が示す時間は、機械時計が示すもので時間の一側面にすぎない。

両モデルにおいては、期待度による経験の差もまったく考慮されていない (池田・クレイマー, 2000)。たとえば、不快な経験であっても、その経験が長く

は続かないことが分かっている場合（滞在期間が数ヶ月あるいは1年で終わると知っている場合など）と、半永久的にその地にとどまらなければならない場合とでは、「ショック」の程度、「適応」の過程に差が生じることは、容易に想像できる。

また、両モデルは最終的には「カルチャーショック」は乗り越えられるものとみなしているが、はたしてそうであろうか（池田・クレイマー, 2000）。1979年7月号の月刊誌『諸君』に、「日本の“カミュ”たち」という特別企画記事が載っている。その中で「引揚げ作家」である本田靖春が自らの経験を次のように記している。

戦後34年も経て、私はこの風土に根づいたという感覚を、いまだに持てない。むしろ40代半ばを越えて、適応不全をますます意識するようになった。日本人であって日本人ではない。そういう感じは、日本育ちの日本人には理解がつかないだろう。気がつくと、私は自分を外側に置いて、『日本人』を眺めている。その眼は外国人のそれではないのだが、自分がこの国の人たちと、かなり異質だという認識を捨てることができない。（星野, 1980b, p. 141より引用）

本田がいまだに「カルチャー・ショック」を乗り越えていない様子が伝わってくる。また、前述の日系アメリカ人や在日韓国・朝鮮人、各国の移住者の中には、いつまでも違和感を持ち続ける人や、「カルチャー・ショック」を完全に乗り越えられない人もいるはずである。こうしたケースは、単なる両モデルのヴァリエーションとして片づけられないのではなからうか。

さらに、両モデルは「カルチャー・ショック」は乗り越えるべきものという前提にたっている。だが、本当に必ず乗り越えなくてはならないのだろうか。たとえば、作家本田靖春の「カルチャー・ショック」経験は、むしろ彼の作品を生み出す原動力となっているとみなすことはできないだろうか。乗り越えるべ

きという前提を括弧に入れると、逆に本田が言うところの「適応不全」がプラスのエネルギーとして作用する様が見えてくるような気がする。

最後に、適応内容の不明瞭さを指摘しておきたい。学者によってさまざまな変数を用いて適応状態を測る試みがなされているものの、何をもって適応とみなすのかがいまだにはっきりしていない (Brein & David, 1971; Church, 1982)。変数のいくつかを上げてみると、ホスト文化への受容 (Noesjirwan, 1966)、満足度、受容感、日常活動への対応 (Brislin, 1981)、気分状態 (Feinstein & Ward, 1990)、文化的に適当な行動やスキルの習得 (Bochner, Lin, & McLeod, 1980; Furnham & Bochner, 1986) などである。

「カルチャー・ショック」及び適応理論分野における用語の不統一、不明確さも適応内容の不明瞭さを助長している。サールとウォードが指摘しているように、“Adaptation” “acculturation” “adjustment” “accommodation” といった用語が相互互換的に使われており、その意味の違いが不明確なままに残されている (Searle & Ward, 1990)。

何を適応とみなすのかは、非常に難しい問題である。だが、ひとつだけ明らかなのが移住地での生活に適応することは必ずしも移住先の文化に同化することではないということである。その地の人たちの生活をまねする、あるいは彼(女)らと同じような生活を送ることが適応ではない。むしろ、自分なりのやり方で日常生活が滞りなく行えるようになる、それが適応した状態といえるのではないだろうか。

全てがうまくいかなかった「ショック段階」に比べて、何事もスムーズに事が運ぶように感じられる、つまり日常生活の基本的問題を解決し滞りなく生活していけるようになる、そして友人・知人関係も良好なものとなった時、新たな地での生活に一応「適応」したとみなせる (池田・クレイマー, 2000)。新たな世界で「前景」として強調されていたものが、「後景」へと沈み日常の中に埋没していく (シュッツ, 1980)。社会生活の細部にわたるまで自己監視しなければならなかった段階から、いちいち考えなくてもいい段階への移行であり、日

常生活を快適にそしてスムーズに送る術を身につけたのである。

そして、日常生活の常態化は、たとえその土地で使われている言語が話せなくても起こりうる（池田・クレイマー、2000）。お互いの存在に慣れ、移住者も地元の人たちもお互いがそれぞれのありのままの姿を受け入れられるような状態になった時に起こりうる。移住者は当然訛があるだろうし、態度や生活のパターンも異なる。地元の人もそうした違いに慣れ、もはやその違いが当然のこととして習慣化し予測されるまでになり、移住者も特別扱いされない状態に慣れ周りの状況をそのまま受け入れられるようになる、これが「適応」状態ではないだろうか。

6. おわりに

以上、「カルチャー・ショック」と適応理論の再検討を行ってきたが、ここで今一度これからの課題としてさらなる考察が必要とされる点を指摘しておきたい。

まず第3項で「カルチャー・ショック」の定義に対する疑問を説明してきた。ここでは特に「ショック」という言葉の見直しを重ねて強調しておきたい。言葉とはカテゴリーである。ある言葉を発するということは、その言葉以外のものとその言葉が指すものが違うこと、つまり境界を明らかにすることである。「ショック」という言葉を使うことによって、「カルチャー・ショック」が指示する現象が曖昧になるのであれば、表現を変える必要がある。表現の変更は、今までの知の蓄積の根本を揺るがす大きなものとなりかねない。だからこそ今まで手つかずのまま放っておかれたのかもしれない。だが、だからといってこのままにしておいてよいということにはならない。日常的に使われている「カルチャー・ショック」は旅行者が新たなものに触れてびっくりしたといった程度で使われている。そうしたいわゆる「カルチャー・ショック」という用語と区別するためにも、新たな表現が必要なのである。最近、ある研究会の討議の中で“cultural bumps”という表現が示唆されたが、そうした表現も含めて検討す

べき時期にきていると考える。

次に第5項で、位相モデルに対する実証的研究のサポートが限定的であること、「U型曲線」及び「W型曲線」モデルの単純さ、時間経験の主観的側面及び期待度による経験の差がまったく考慮されていないこと、「カルチャー・ショック」は必ず乗り越えられるもの乗り越えるべきものとみなしていること、適応内容の不明瞭さを指摘した。モデルというのは最大公約数的現象を提示しているため、多様な現象と照らし合わせた場合ある程度の誤差が生じるのは止むをえない。しかしその誤差があまりにも大きくなれば、モデル自体の意味がなくなる。適応の位相モデルがそこまで現象とかけ離れているかどうかは今の時点では判断できないが、少なくともモデルの根本的見直しをも視野に入れた検討作業が必要ではなからうか。

さらに、「カルチャー・ショック」及び適応理論が対象とする現象が何なのか、つまりソジョーナーのみを問題としているのかそれとも永住者も含めるのかを明らかにする必要がある。大多数の研究がソジョーナー（米国の場合は軍隊における海外派遣者、平和部隊、ビジネスにおける海外派遣者、留学生、日本の場合は留学生、海外派遣者、帰国生など）を対象としているが、永久または半永久的移住者に関する研究も少数ながら存在する。たとえば稲村博（1980）は日系移民、国際結婚をして移住した人々、特殊技能を活かすために海外に移住した人々なども研究対象として含めている。タフト（Taft, 1966）、キム（Kim, 1988）なども永久または半永久的移住者を研究対象としている。だが、はたしてソジョーナーと永久または半永久的移住者の経験とを同じ土俵の上で述べてよいものであろうか。両者の経験は質的にかなり違うものではないだろうか。筆者は既存の「カルチャー・ショック」及び適応理論の対象はソジョーナーに限定すべきであると考え。永住者の長年にわたる拭いきれない違和感を説明するには、別の理論構築がなされるべきである。

最後に一言、本論文の限界について触れておきたい。本論文で取り上げた適応理論は、「カルチャー・ショック」に関連するものが大多数で、ここで取り上

げていない適応理論がまだかなりあることは筆者も認識している。次の段階として、社会学分野で取り扱われている適応理論も含めた包括的な文献研究を行う用意がある。

中でも、ジンメルの「余所者」理論及びその影響については押さえておかなければならない。永久または半永久的移住者の適応に関する理論を構築する上で、ジンメルの「余所者」は示唆的であると考える。ここで簡単にその理論を紹介しておく。

ジンメルの「余所者」とは、一定の空間的広がり内部に定着してはいるが初めからそこへは所属していない者である。つまり、近接と疎遠の統一体として存在しているのだが、その疎遠とは積極的な意味でそうであるのであって、余所者とそうでない者とが特別な相互作用形式をなしている。また、余所者とそうでない者は「一般的に普遍的なもののみ」を共有しているにすぎず、そうした意識が「まさに共通でないものを特に強調させることとなり、このことによって、遠近の二つの要素の間には特別な緊張が高まる」（ジンメル、1979, p. 135）のである。

ジンメルの余所者が持つ遠近2要素間の特別な緊張関係は、デュボア(1903/1965)の説く「二重の意識」に通じる。デュボアは米国黒人の経験として「二重の意識」を次のように説明する。

アメリカの世界—それは、黒人に少しも真の自我意識をあたえてはくれず、自己をもう一つの世界の事物を通してのみ見ることを許してくれる世界である。この二重に屈折した意識、この絶えず自己を他者の目によって見るという感覚、軽蔑と憐びんをたのしみながら眺めているもう一つの世界の巻き尺で自己の魂をはかっている感覚、このような感覚は、じつに異様なものである。かれはいつでも自己の二重性を感じている。—アメリカ人であることと黒人であること。二つの魂、二つの思想、二つに分裂した努力、そして一つの黒い体のなかで戦っている二つの理想。(p. 16)

前述の日系人や在日韓国・朝鮮人といった永久または半永久的移住者は、ジ・ンメル之余所者のように遠近 2 要素間の特別な緊張関係を持ちかつ「二重の意識」に悩まされている、だからこそ自らが所属できるようなコミュニティを希求しているのではなかろうか。この点に関してはさらなる考察が必要である。しかし、本稿の目的からははずれるしまた紙面の関係上これ以上の考察は許されないので、筆者の次の課題として残されていることを記しておくにとどめる。

参考文献

- Adler, P. S. (1975). The transitional experience: An alternative view of culture shock. *Journal of Humanistic Psychology*, 15, 10-14.
- Bennett, J. (1977). Transition shock: Putting culture shock in perspective. *International and Intercultural Communication Annual*, 4, 45-52.
- Bochner, S., Lin, A., & McLeod, B. M. (1980). Anticipated role conflict of returning overseas students. *Journal of Social Psychology*, 110, 265-272.
- Brein, M., & David, K. H. (1971). Intercultural communication and the adjustment of the sojourner. *Psychological Bulletin*, 76, 215-230.
- Brislin, R. W. (1981). *Cross-cultural encounters*. New York: Pergamon Press.
- Church, A. (1982). Sojourner adjustment. *Psychological Bulletin*, 91, 540-572.
- 同胞高齢者大阪府調査 (1997) <http://www.korea-np.co.jp/sinboj...boj97-5/sinboj970527/sinboj97052773.htm>
- デュボア, W. E. B. (1965) 『黒人のたましい エッセイとスケッチ』 木島始・鮫島重俊・黄寅秀訳, 未来社 (原著, 1903)
- Feinstein, B. E. S., & Ward, C. (1990). Loneliness and psychological adjustment of sojourners: New perspectives on culture shock. In D. M. Keats, D. Munro, & L. Mann (Eds.), *Heterogeneity in cross-cultural psychology*. Lisse, Netherlands: Swets & Zeitlinger.
- Foster, G. M. (1973). *Traditional societies and technological change*. New York: Harper & Row.
- Furnham, A., & Bochner, S. (1986). *Culture shock: Psychological reactions to unfamiliar environments*. London: Methuen.
- Gadamer, G-H. (1975). *Truth and method* (J. Weinsheimer & D. Marshall, Trans.). New York: Seabury Press (Original work published 1960).
- Gullahorn, J. T., & Gullahorn, J. E. (1963). An extension of the u-curve hypothesis. *Journal of Social Issues*, 19 (3), 33-47.
- Guthrie, G. (1975). A behavioral analysis of culture learning. In R. Brislin, S. Bochner, & W. Lonner (Eds.), *Cross-culture perspectives on learning*. New York: Wiley.
- Hall, E. T. (1959). *The silent language*. New York: Doubleday.

- 原 裕視 (1985) 「異文化衝撃とその影響」『生活環境とストレス』山本和郎編, 垣内出版 pp. 222-267.
- 本田靖春 (1979年7月) 「特別企画 インタビュー・ルポルタージュ 日本の“カミュ”たち」『諸君』198-225
- 星野 命 (1980a) 「カルチャー・ショック」『現代のエスプリ』161: 5-29
- 星野 命 (1980b) 「帰国日本人の生活適応とアイデンティティ」『現代のエスプリ別冊 日本人の構造』祖父江孝男編, 至文堂 pp. 112-150
- 池田理知子・クレイマー, E. M. (2000) 『異文化コミュニケーション・入門』有斐閣
- 稲村 博 (1980) 『日本人の海外不適応』NHKブックス
- 井上正孝 (1979) 「カルチャー・ショックを和らげる—クロス・カルチュラル・コミュニケーショントレーニングの実態—」『社員教育』12 (242): 32-36
- Kim, Y. Y. (1988). *Communicating and cross-cultural adaptation: An integrative theory*. Clevedon, England: Multilingual Matters.
- Klineberg, O., & Hull, F. (1979) *At a foreign university*. New York: Praeger.
- 近藤 裕 (1981) 『カルチャー・ショックの心理—異文化とつきあうために』創元社
- Lundstedt, S. (1963). An introduction to some evolving problems in cross-cultural research. *Journal of Social Issues*, 14, 1-9.
- Lysgaard, S. (1955). Adjustment in a foreign society: Norwegian Fulbright grantees visiting the United States. *International Social Science Bulletin*, 7 (1), 45-51.
- Noesjirwan, J. A. (1966). *A study of the adjustment of some Indonesian students studying in Australia*. Unpublished master's thesis, Victoria University, Wellington.
- Oberg, C. (1960). Culture shock: Adjustment to new cultural environments. *Practical Anthropology*, 7, 170-179.
- 近江 誠 (1990) 「カルチャー・ショック」『日本人の異文化コミュニケーション』鍋倉健悦編著, 北樹出版 pp. 118-144
- シュッツ, A. (1980) 『現象学的社会学』森川真規雄・浜日出夫訳, 紀伊国屋書店 (原著, 1970)
- Searle, W., & Ward, C. (1990). The prediction of psychological and sociocultural adjustment during cross cultural transitions. *International Journal of Intercultural Relations*, 14, 449-464.
- ジンメル, G. (1979) 「余所者について」『秘密の社会学』居安正訳, 世界思想社 pp. 125-136
- Smalley, W. (1963). Culture shock, language shock, and the shock of self-discovery. *Practical Anthropology*, 7, 179-182.
- Taft, R. (1966). *From stranger to citizen*. London: Tavistock.
- Taft, R. (1977). Coping with unfamiliar cultures. In W. Warren (Ed.), *Studies in cross-cultural psychology* (Vol. 1). New York: Academic Press.
- Trifonovitch, G. (1977). Culture learning/culture teaching. *Educational Perspectives*, 16, 18-22.
- Weissman, D., & Furnham, Q. (1987). The expectations and experiences of a sojourning temporary resident abroad: A preliminary study. *Human Relations*, 40, 313-326.

吉坂有香 (1999) 『「在日」外国人の高齢化と社会福祉—神戸市長田区の在日韓国・朝鮮人
一世をとおして』 <http://syass.kwansei.ac.jp/tatsuki/Seminar2/sotsuron3>

Reconsidering Theories of “Culture Shock” and Adjustment

<Summary>

Richiko Ikeda

More than forty years have passed since Oberg (1960) popularized the term “culture shock.” In Japan, however, the study of “culture shock” was not explored until the 1970s. In the 1980s, such major scholars as Hoshino (1980), Kondo (1981), and Hara (1985), revisited the study of “culture shock” and adjustment. Although the defining features of “culture shock” and adjustment have been sporadically argued since then, there was little substantial work trying to reveal the essence of “culture shock” and adjustment.

Reviewing the relevant literature made the scholar’s standpoint clear. They assume that the “host” is the powered and new comers are powerless, and the latter have to adapt to the former. The experience of a person who enters a new environment, however, affects not only him/herself, but the new environment. It is a reciprocal process. Furthermore, it is unclear what “culture shock” signifies. The term “shock” implies a sudden occurrence with much disturbance. But long-lasting uneasiness, depression, etc., which are not a shock at all as Inoue (1979) pointed out, are currently included in the phenomenon “culture shock.” The author suggests that a new term describing the experiences of a new comer be created. Overall, the present study is an attempt to delineate what counts as “culture shock” and adjustment.